

海外生活 レポート 44



清水直子さん



コンゴ民主共和国、キンシャサ在住

活動: ブログや雑誌コラム、イベント等でコンゴの庶民生活を紹介。アフリカンプリント布のエコバッグ等の製作、日本での販売。

若者の可能性が花開くことを目指して



ストリートフードも豊富。こちらは牛串焼き



元気で可愛い子ども達

INFORMATION



コンゴ民主共和国

面積 2,345,000km²
人口 8,679万人
首都 キンシャサ
公用語 フランス語

★5月22日にニールゴゴ火山が噴火しましたが、キンシャサとはかなり距離があり、清水さんファミリーはご無事だそうです。ご安心ください。

はじめに

コンゴ民主共和国と言えば、2018年、ノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ医師を通して、東部国境地帯の鉱物資源利権をめぐる紛争とその下での性暴力が知られるようになりました。この鉱物資源とはPCやスマホのコンデンサに用いられるタンタルなどで、日本のみなさんとも無関係ではありません。毎日のように紛争被害が報道されますが、首都キンシャサは紛争地から1,500km離れており、一般のキンシャサ市民にとっては少し遠い出来事のようにです。「ville(ヴィル)」と呼ばれる政治・経済の中心地区にはレストランやショッピングモール、高級ホテルが並び、お金持ちと外国人が住んでいて、一見すると紛争とは無縁の近代的な街に見えます。一方、大多数の市民が暮らす下町“cite(シテ)”はトタン屋根の家が密集し、ヴィルとは別世界の格差がありますが、ここでも日々の生活に追われる人々にとって、紛争は身近ではありません。

陽気で賑やかな下町

私は下町に暮らしてきました。子どもの声が響き、若者が行き交う下町の光景は、少子化問題を抱える日本から見ればうらやましい限り。人々は“liputa(リプタ)”と呼ばれる鮮やかなプリント布の服を着て、街じゅうに大音響で流れるルンバのリズムに合わせて陽気に踊り、いつもお祭りみたいに賑やかです。家庭料理、果物、ストリートフードなど身近に美味しい物も沢山あり、下町の魅力を語れば枚挙に暇がありません。



「Mabumu(マブム) = 牛の胃袋のトマトソース煮込み」と「Ndunda(ンドゥンダ) = アマランサスの葉の炒め煮」

「最貧国」と呼ばれる現状

同時に問題も山積みです。停電と断水は毎日。道路は何十年も補修されず凹凸。ゴミの収集・処理は市民任せで、路上や川・側溝にペットボトル等のゴミが大量に捨てられています。9月半ばから5月頃までの雨期には、大雨が降るたびにゴミで詰まった水路があふれ出し、街は洪水状態で外出もままなりません。

ドル高に伴う物価上昇もここ数年で倍近くになり、1日1.9ドル以下で生活する人が77%という状況で、庶民の暮らしを圧迫しています。劣悪な衛生環境と医療の質・量の不足によって、人口1千人当たりの5歳未満の死者数は、日本が3人なのに対してコンゴは119人です。これが「最貧国」と呼ばれる現状です。



水が引かず洪水ようになった道路

「Kotonga Kitoko(コトンガ・キトコ) プロジェクト

私が今取り組んでいるのが、リプタでエコバッグなどの小物を製作し日本で販売する「Kotonga Kitoko(コトンガ・キトコ)」というプロジェクトです。“素敵なお仕事”を意味し、雇用づくりと廃プラスチック問題の啓発に繋げることを目指しています。

また、貧困家庭の子どもを支援する施設でピアノレッスン＆コンサートをチャリティーで開催することも企画中で、日本から友人であるピアニストの山野友佳子さんを招く準備をしています。詳細はフェイスブックページやインスタグラムの投稿をご覧ください。

★facebookページ「一つ空の下 同じ地球の上」@mabekitoko

★instagram「Kotonga Kitoko」@kotongakitoko



若者が作った「Kotonga Kitoko」のバッグ



ミシン工房で働く若者達

子どもや若者が持つたくさんの可能性が花開き、この国を変えていく原動力になることが私の願いです。

2月の「外国人市民による日本語スピーチコンテスト」で落語を披露して

 フランス共和国出身

シリル・コピーニ(尻流 複写二)さんは南フランスのニース出身。

高校時代より日本語に興味を持たれ、2010年に上方落語林家染太師匠との出会いをきっかけに本格的に落語を学ばれました。また、落語を外国語で演じる三遊亭竜楽師匠のフランス公演のコーディネーターや通訳で同行するなど落語の海外普及にも積極的です。現在も「落語パフォーマー」としてその豊かな個性からテレビやラジオで活躍中です。

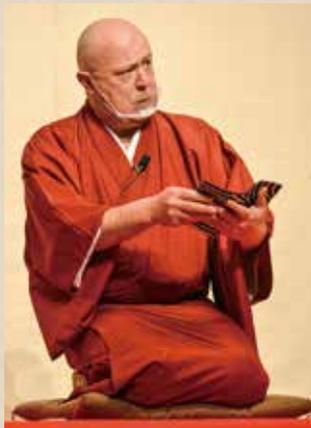
日本に来られて24年。今回はシリルさんご自身のこと、落語をはじめたきっかけや今後の夢についてお話を伺いました。

1 ご出身の南フランス・ニースはどんなところですか？

おおざっぱでよく喋る人が多いです(笑)。フランスでは、南のほうに住んでいる人はおしゃべりが多いとよく言われるのですが、ニースはまさに南。明るい人がほんとに多い。食文化も、地中海に近いこともあって、オリーブオイルや豆を使った料理、ピッツアやパスタなどイタリアの影響を受けています。パリで食べるパスタは麺がふにゃふにゃですが、ニースはめっちゃくちゃ歯ごたえのあるアルデンテです(笑)。

2 日本に興味を持ったきっかけは何ですか？

通っていた高校に、当時では珍しく日本語コースがあったんです。最初はおもしろそうだなって軽い気持ちで始めたのですが、気がついたらハマっていました(笑)。高校卒業後も、パリの大学で日本の近代文学を勉強していましたし、実は1年間、長野県松本市にある信州大学に留学もしていたんですよ。



落語パフォーマンスの様子

3 日本に来られたのはいつですか？

信州大学の留学からフランスに戻って、その翌年(1997年)に、ちょうど福岡で仕事をする機会があって福岡にやって来たんです。そしてそのままずっと日本で生活しています。今では「シリルの博多弁はめっちゃくちゃ福岡のおっさんっぽい」って嫁に言われたりします。もう日本生活24年ですからね(笑)。

4 なぜ「落語」をやってみようと思ったのですか？

日本に来てからずっとフランスの文化を日本に紹介する仕事をやっていました。長年続けているうちに、このまま同じことを続けるより、逆に日本の文化をフランスに紹介するのも自分の役割としてあるんじゃないかと思うようになったんです。じゃあ日本の何をフランスに伝えようか、と考えた時に落語が思い浮かんだんです。実際、自分でも落語を見に行くと楽しそうだなあと思っていたので、でも修行とか弟子入りとか自分の性格的に無理やわ〜って(笑)。そんな矢先、大阪の落語林家染太師匠に出会ったんです。師匠から「修行は東京の落語ではあるけど、大阪はおもしろいやつ誰でも高座※にあがってええねん」って言われて。それで一年間大阪に通って、少しずつ落語を覚えていったんです。

※演芸が行なわれる舞台の名称

5 落語を続けてみて、いかがですか？

やっぱり私は根本的に「言葉」が好きなんです。日本語が好きなんです。落語って楽しく日本語が学べるし、落語のおかげで日本語が上手になったねって褒められますしね。それに、海外に日本の文化を紹介する時に、落語って日本のことを楽しく伝えられる素晴らしいツールなんです。着物や扇子で伝わる部分もありますし、演目の中でも人間模様や物語で様々なことを楽しく伝えることができるんです。



シリル・コピーニ(尻流 複写二)さん

6 日本の演目をそのままフランス語に翻訳すれば笑いは起きますか？

無理です(笑)。なのでフランスで落語をする時は工夫をしています。落語の演目は酔っぱらいや夫婦喧嘩といった万国共通のテーマが多いので、物語はそのまま、日本語の言葉遊びやオチをフランス語でアレンジしたり、表現を変えたりして伝えるようにしています。

7 シリルさんの今後の夢はなんですか？

笑点に出ること、ではないんです。オファーが来たら断らないですけど(笑)。

やっぱり落語を通して、日本とフランスの両方にもっと役に立ちたいですね。いつかフランスで舞台芸術の学校を作ったり、落語研修を開いたりできればいいですね。これからも落語に興味がある人だけでなく、日本のお芝居や舞台に興味がある外国人に、日本の文化を伝えていきたいと思っています。

シリルさんのホームページはこちら:www.cyco-o.com

インタビューを終えて

シリルさんの言葉選びの巧みさ、素晴らしい表現力の背景には「伝えたいという情熱」と「日本語への理解の深さ」を感じました。これからも話芸と和芸で日本とフランスの大きな架け橋となってくれることを期待しています。



鈴木編集ボランティアの取材を受けるシリルさん

(取材・文:編集ボランティア 鈴木宗臣/写真:編集ボランティア 安田芳郎)